

1. 平成31年度（令和元年度）調査および結果の特徴

平成31年度調査問題は、学習指導要領の理念・目標・内容等に基づくものとし、小学校の調査問題については小学校第5学年までに、中学校の調査問題については中学校第2学年までに十分に身に付け、活用できるようにしておくべきと考えられるものを、各領域等からバランスよく出題された。その際、国語および算数・数学については「4年間のまとめ」（国立教育政策研究所において、平成19～22年度の4回の調査結果を分析して、「成果」と「課題」を整理した報告書）で指摘した課題や平成24年度～30年度調査で見られた課題についての改善状況を把握する観点からの問題も出題された。今回の調査結果から、これまでの調査で見られた課題について依然として課題の見られるものがある。一方、今回の調査を見る限り、概ねできているものもあるが、これらについても引き続き注視が必要である。

小学校及び中学校の調査結果は次のとおりである。

小学校

	課題が見られるもの	概ねできているもの
国語	<ul style="list-style-type: none"> 相手にわかりやすく情報を伝えるための記述の工夫を捉えること。 目的や意図に応じて自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと。 漢字（同音異義語）を文の中で正しく使うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を得るために、本や文章全体を概観して効果的に読むこと。 インタビューの場面で、相手の意図を捉えながら聞き、自分の理解を確認する質問をすること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> 計算に関して成り立つ性質を見だし、表現すること。 場面の状況に応じて、数理的に捉え、数学的に表現・処理し、得られた結果から判断すること。 図形の性質や構成要素に着目して、図形を観察・構成すること。 資料の特徴や傾向を基に考察したり、複数の資料の特徴や傾向を関連付けて判断したりすること。 	<ul style="list-style-type: none"> 台形について理解すること。

中学校

	課題が見られるもの	概ねできているもの
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や場面に応じて話し合い、自分の考えをまとめること。 ・目的や意図に応じて相手に分かりやすく書くこと。 ・文章の構成や展開を理解し、内容を的確に捉えること。 ・字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して書くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの話題や方向を捉えること。 ・自分が伝えたいことについて資料の中から根拠となる情報を取り出して正確に書くこと。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明すること。 ・結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見いだし、説明すること。 ・事象の数学的な解釈に基づき、問題解決の方法を数学的に説明すること。 ・データの分布の傾向を読み取り、判断することを通して、統計的に問題解決すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な連立二元一次方程式を解くこと。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・理解した内容を踏まえ、目的・場面・状況に応じて、話し手や書き手の伝えたいことは何かを理解するなど、概要や要点を捉えること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話されたり書かれたりしている内容を聞き取ったり、読み取ったりすること。

上記の分析結果は、全国の各設問の平均正答率や正答数分布の状況等から明らかになったことであり、この平均正答率や正答数分布は、熊取町と全国、大阪府との間で若干の差はあるものの、概ね同じ傾向にある。

したがって、これらの結果の特徴や課題は、熊取町を含め小学6年生及び中学3年生全体の課題であると言える。

また、熊取町の平均正答率を全国の結果と比較すると、小学校では国語、算数とも上回り、中学校では国語は下回り、数学および英語は上回った。

大阪府との比較では、小学校においては、国語、算数とも上回り、中学校では国語は下回り、数学および英語は上回った。

2. 学力調査から明らかになった課題と今後の取り組み

(1) 国語の課題

今回実施された「平成 31 年度全国学力・学習状況調査」における国語の状況については、小学校国語において全国・大阪府平均を上回る結果となった。中学校国語においては全国平均を下回り、大阪府平均と同程度の結果となった。

小学校の領域・観点別平均正答率の比較では、「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」において、全国・大阪府平均を上回る結果となった。「話すこと・聞くこと」および「書くこと」については、全国平均を下回り、大阪府を上回る結果となったが、これらの観点・領域の設問を個々に比較すると、全国を上回る設問もあった。無解答率については、おおむね全国・大阪府より低い結果となった。

中学校の領域・観点別平均正答率の比較では、「話すこと・聞くこと」「読むこと」は全国を下回り、大阪府を上回った。「書くこと」および「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について、全国・大阪府を下回る結果となった。問題形式が短答式・記述式の問題の場合に無回答率が全国より上回り、平均正答率も大きく下回る傾向が見られた。

小学校では、今年度も引き続き記述式の「書くこと」に大きな課題が見られた。平成 31 年度は「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと」について課題が見られたが、平成 29 年度は「目的や意図に応じ、必要な内容を整理して書くこと」、平成 30 年度は「目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書くこと」「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること」が課題として挙げられた。

また、短答式で問われた「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に課題が見られた。「漢字を文の中で正しく使う」設問では、無回答率は全国・大阪府を大きく下回るが、同音異義語が複数存在する熟語について、平均正答率が低い結果となった。他に、「文と文との意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書く」ことに課題が見られた。

中学校では、「封筒の書き方を理解して書く」（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）、「話し合いの話題や方向を捉えて自分の思いをもつ」（話すこと・聞くこと）、「伝えたい事柄について、根拠を明確にして書く」（書くこと）において、平均正答率が全国を大きく下回った。これらの設問はいずれも、短答式または記述式であった。

(2) 国語力向上に向けての方策

(1) に挙げた課題を踏まえ、「漢字を文の中で正しく使うこと」および「話し合いの話題や方向を捉えて自分の思いをもつ」について、指導事項の系統性及び国語の授業を改善するための方策を示す。

○ 文や文章の中で、漢字を正しく

漢字の学習指導に当たっては、日常的に文や文章の中で適切につかうことができるようにすることが大切である。そのためには、新出漢字を読み方や字形に注意して繰り返し練習することにとどまらず、自分が書いた文章を見直す中で、漢字の持つ意味を考えながら、文や文章の中での正しい使い方を習得できるようにすることが大切である。また、漢字の指導は、各学年の発達段階に応じて指導することが大切である。その際、それぞれの学年において、以下を踏まえて指導することが効果的である。

第1学年及び第2学年

第1学年では、漢字に対する興味や関心、字形に関する意識などを養いながら、学年に配当されている80字の漢字を読めるようにする。第1学年の配当漢字には、象形文字や指示文字が多く含まれているので、漢字の字形と具体的な事物（実物や絵など）と結びつけるなどの指導を工夫し、漢字が表意文字であることを意識しながら、漢字に対する興味や関心を高められるようにする。また、漢字単独の読みだけでなく、文や文章の中で漢字を読むことも大切にして、文脈の中で意味と結び付けていくようにする。

漸次書き、文章や文章の中で使うとは、学習した漢字を習得できるように少しずつ書くことを積み重ねるとともに、文や文章で使うようにすることである。当該学年の漢字を知っていることにとどまらず、実際につかうことによって、有効性を実感できるようにし、第2学年の終わりまでに文や文章の中で使うことができるよう、2学年にわたって確実に定着させていくことが大切である。

第3学年及び第4学年

中学年の指導に当たっては、〔知識及び技能〕の③「ウ 漢字がへんやつくりなどから構成されていることについて理解すること。」との関連を図ることが有効である。

漢字による熟語などの語句の使用が増えてくる時期である。「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2④「イ 理解したり表現したりするために必要な文字や語句については、辞書や事典を利用して調べる活動を取り入れるなど、調べる習慣が身に付くようにすること。」を踏まえ、漢字辞典を使って漢字の読みや意味などを自分で調べる活動を積極的に取り入れ、習慣として定着するようにすることが大切である。

また、文や文章を書く際には、学習した漢字を使う習慣が身に付くようにすることが重要である。

第5学年及び第6学年

高学年では、漢字による熟語などの語句の使用が一層増加する時期である。したがって、文や文章を書く際には、例えば、「収める」、「納める」、「修める」、「治める」などの同音異義語に注意するなど、漢字のもつ意味を考えて使う習慣が身に付くようにすることが重要である。

「小学校学習指導要領解説 国語編」（平成29年3月）による

中学校

漢字の読みについては、一字一字の音訓を理解し、語句として、話や文章の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことが求められる。そのため、教科書を読むことや読書を通して、漢字の読みの習熟と応用を図ることが大切である。また、字形と音訓、意味と用法、語の成り立ち、熟語の構成などについて必要に応じて指導し、例えば、漢字の構成要素である「へん」「つくり」などに注目して、読みを類推することができるようにすることも考えられる。さらに、「A 話すこと・聞くこと」の指導においても、例えば、同音の語句の意味に誤って理解されそうなときは、漢字を例示することでこれを避けるといったような活動を取り入れるなど、機会があるごとに漢字を意識するようにすることが考えられる。

漢字の書きの指導に当たっては、自体、字形、音訓、意味と用法などの知識を習得し、文脈に即して漢字を書くように常に注意するようにすること、文章の中ばかりではなく、「A 話すこと・聞くこと」の学習の中や、他教科等の学習や日常の会話の中でも漢字の書きについて意識するようにすることが大切である。そのためには、必要に応じて辞書を引くことを習慣づけることが有効である。

また、書写との関連を図ることが重要である。その際、自体、点画、筆順等に注意し、楷書で正しく整った字を書くようにすることが求められる。

「中学校学習指導要領解説 国語編」(平成 29 年 3 月)による

○ 話合いの話題や方向を捉え、自分の考えをもつ

話合いをする際には、話題や方向を的確に捉え、自分の考えをもちながら参加するように指導することが大切である。その際、必要に応じて話合いの話題について確認したり、話合いの経過を捉えたりすることができるように指導することも重要である。

例えば、小学校での学習を踏まえ、司会の進め方や話合いの記録の仕方などを確認した上で、実際に記録をとりながら話合いを行うなどの学習活動が考えられる。その際、話合いの途中で、それぞれの発言の仕方について留意すべき点を確認したり、目指している到達点に向けて取り上げる話題をどのように絞り込めばよいかについて考えたりするなど、話合いの仕方を見直しながら指導することも効果的である。

「話合いの進め方の検討、考えの形成、共有」(話し合うこと)の系統性および言語活動例について、以下にまとめる。

	学年	指導事項	言語活動例
小学校	第1学年 及び 第2学年	オ 互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。	イ 尋ねたり応答したりするなどして、少人数で話し合う活動
	第3学年 及び 第4学年	オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	ウ 互いの考えを伝えるなどして、グループや学級全体で話し合う活動。
	第5学年 及び 第6学年	オ 互いの立場や意図を明確にしながから計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。	ウ それぞれの立場から考えを伝えるなどして話し合う活動。
中学校	第1学年	オ 話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること。	イ 互いの考えを伝えるなどして、少人数で話し合う活動。
	第2学年	オ 互いの立場や考えを尊重しながら	イ それぞれの立場か

		話し合い、結論を導くために考えをまとめること。	ら考えを伝えるなどして、議論や討論をする活動。
	第3学年	オ 進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い、合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること。	イ 互いの考えを生かしながら議論や討論をする活動。

(参照)「平成31年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校・中学校」

「小学校・中学校 学習指導要領解説 国語編」(平成29年3月)

(3) 算数・数学の課題

今回実施された「平成31年度全国学力・学習状況調査」における算数・数学の状況について、小学校、中学校ともに、全国・大阪府平均ともに上回る結果となった。

学力調査の結果から、小学校では「数と計算」、「量と測定」、「図形」、「数量関係」とすべての領域で全国・大阪府を上回っている。

「数と計算」の領域においてはおおむね理解できているものの、「加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすることができる」、「示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述できる」の問題で課題が見られた。

また、問題形式「記述式」の区分で正答率が、大阪府を上回っているものの、全国を若干下回っている。しかし、記述式の各問題での無解答率はほとんどの問題で全国・大阪府を下回っており、積極的に解答しようとしたと考えられる。

中学校においては、「資料の活用」が大阪府を上回っているものの、全国を下回った。「資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる」、「問題解決をするためにどのような代表値を用いるべきかを判断することができる」の問題で課題が見られた。

記述式の各問題での無解答率は大阪府を下回っているものの、全国よりも上回っている。その他の問題形式での無解答率では全国・大阪府を下回っている問題も多くあり、文章で表現することに課題があると考えられる。

これらのことから、全国・大阪府と同様に、小学校・中学校とも、児童・生徒の基礎的基本的な力については定着しているものの、特定の領域で課題が見られ、「表現すること」に課題が見られる。算数・数学においては学習内容の系統性が高いことから、小学校・中学校の系統性を意識し、表現の充実に向けた授業改善を続けていく必要がある。

児童生徒質問紙調査からは、「算数・数学の勉強は好きですか」の質問に、肯定的な回答をした児童生徒の割合は全国・大阪府より高くなっている。また小学校算数に関する項目

のすべてで、全国・大阪府より肯定的な回答の割合が高かった。

中学校では、調査対象生徒が小学6年生当時の回答結果との比較において、算数に関するほとんどの項目での質問に、肯定的な回答をした児童の割合が全国・大阪府より高かった。しかし、中学3年生時の生徒質問紙調査では、「数学の勉強は好きですか」については肯定的な回答が多くみられるが、その他の「数学の授業の内容はよく分かりますか」、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」等の質問に肯定的な回答をした生徒の割合は、全国・大阪府より低くなっている。

これらのことを考慮し、児童生徒の生活との関係を熟考し、授業における課題を児童生徒の実態により応じたものにしていくことが求められる。

(4) 算数・数学の学力向上のための方策

小学校・中学校に共通して、児童・生徒の説明する力、表現力に課題が見られる。また、特定の領域で、課題を把握し、解決を導くことが難しいという課題が明らかになった。そこで、それらの力を育むため、算数・数学の学力向上の方策を以下に4点示す。

1. 「目的を持って見通しを立てたり、結果を振り返ったりする」指導の充実

そのため、下記の学習過程の充実により一層取り組んでいかなければならない。

【授業づくりのポイントを5つの段階にわけた学習過程】

- | | |
|--------|----------------------|
| ①出合う | 課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合う |
| ②結び付ける | 既存・既習の知識・技能と結びつける |
| ③向き合う | 自分の力を頼りに一人で課題に向き合う |
| ④つなげる | 友だちの考えをつなぎ、考えを深める |
| ⑤振り返る | 自分の学びを振り返り、自己評価を行う |

【出典】 「大阪の授業STANDARD」 平成24年5月大阪府教育センター

「算数・数学が好き」という肯定的な回答をしている児童生徒が多くいる状況ではあるが、課題と①出合うことを大切に、課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合えるような授業づくりが大切である。②結び付けるの場面において、既存・既習の知識・技能と結びつけるとともに、その知識・技能を使って課題解決の方法と結果について見通しを立てることが大切である。またそこで立てた見通しをもとに、結果を振り返る活動を充実させていく必要がある。

例えば、問題解決の方法を話し合う場面で、式を用いて解決する方法を取り上げるのであれば、何についての式か、何を求めればよいかを確認する中で説明を洗練していくことも考えられる。その上で、予想した事柄について説明する活動を設定することが大切である。また、予想する際には、正しい予想だけでなく、誤った予想も取り上げ、全体でそれ

らが正しいかどうかを説明していく活動を取り入れることが大切である。

2. 児童・生徒が主体的に関わり、表現する授業づくりの充実

形式的な計算・測定の処理だけでなく、日常の事象と関連付けたり、児童・生徒が主体的に関わる場面を設けたりすることが重要となる。そのためには、算数的活動・数学的活動の充実と、言語活動の充実が必要である。

③向き合うや④つなげるの場面では、解決へのプロセスをノートに記述したり、考えた内容を他者へと伝えたりする活動が必要であると考えられる。

例えば、式の指導においては、単に計算するだけでなく、具体的な場面に対応させながら、事柄や関係を式に表すことができるようにする。さらに、式を通して場面などの意味を読み取り言葉や図を用いて表したり、式で処理したり考えを進めたりすることが大切である。さらに、式を、言葉、図、表、グラフなどと関連付けて活用し、他者に対して、自分の考えを説明したり、分かりやすく伝え合ったりできるようにすることが大切である。

3. 系統的・継続的な学びの充実

思考・判断したことを的確に表現することができるようにするために、系統的に数学的な思考力・表現力を高める指導計画を考える必要がある。校種間での内容の関連を踏まえ、授業で配慮・工夫すべきことを捉えることが重要である。

4. 授業において、説明する際の記述内容を明確にした指導

小学校・中学校に共通して、記述式の設問では、正答率が低い設問があることから、説明の内容が不十分であったと考えられる。そのため、算数・数学科においては、言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて、筋道を立てて説明したり論理的に考えたりして、自ら納得したり、他者を説得したりできることが大切である。その際、何を記述し、何を説明すればいいのか、その内容を明確にしながらい指導していくことが必要である。

これらの上記1～4の方策が、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながるものと考えられる。

(5) 英語の課題

今回実施された「平成31年度全国学力・学習状況調査」における英語の状況については、本町における平均正答率は全国・大阪府の平均を若干上回る結果となった。各領域の正答率については、全国および大阪府の傾向と概ね一致しており、特定の領域で本町において課題が見られるという結果ではなかった。

「聞くこと」の領域においては、比較的短い英語であれば正確に聞き取り、適切な答え

を選択できる力はあると考えられるが、一定のまとまりのある英語を聞き取って概要を理解し反応すること、また、そのようなまとまりのある英語の中から必要な情報を理解し把握することやそれに適切に応じることに課題が見られた。

「読むこと」の領域については、日常的な話題について簡単な語句や文で書かれたものの内容を正確に読み取る力はあると考えられるが、「聞くこと」の領域と同様、一定のまとまりのある説明文を読んで、その中でポイントとなる中心的で大切な部分を理解することに課題があると考えられる。

「書くこと」の領域においては、文中の空所となっている接続詞を補充する設問や、与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語を補って会話が成り立つように英文を書いたりする設問で、あまり論理的に思考する必要がないものの正答率が高いが、少し考えて答える必要がある設問については正答率が低い傾向が見られた。また、与えられたテーマについて考えを整理し、文と文とのつながりなどに注意しながらまとまった文章を書く設問においては、正答率が低くなっている。

「話すこと」の課題については、コンピュータを用いて初めて実施された調査であり、今回は参考値となっているが、新学習指導要領で新たに設定された「話すこと [やり取り]」の中で、実際のコミュニケーションの場面を想定した即興性について示されていることから、そのことを踏まえた指導を考えていく必要がある。また、あわせて生徒の英語による発信力を高めていく指導を行う必要がある。

平成 31 年度の質問紙調査では、「英語の勉強は大切だと思いますか」という設問に対して、肯定的な回答をした生徒が 8 割を超えている。また、「英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という設問に対しても、肯定的な回答をした生徒が 8 割を超えている。一方で、「英語の勉強は好きですか」という設問に関しては、肯定的な回答をした生徒は、全国・大阪府と同様 5 割台であるが、全国・大阪府と比べて若干下回っている。英語の学習意欲を高め、相手が英語で話していることを知りたい、自分の思いを英語で伝えたいという気持ちを育てていくような授業づくりがさらに求められる。

(6) 英語の学力向上に向けての方策

「聞くこと」「読むこと」の領域において、一定のまとまりのある英語から必要な情報を理解し適切に応じる力や、「書くこと」の領域において、考えて一定のまとまりのある英文を書く力に課題があると考えられる。また、それら複数の技能を統合した力も求められることから、「話すこと」も含めてそれらの力を育成するための英語授業における方策

を示す。

聞くこと

○聞いて把握した内容について、適切に応じる指導の充実

依頼や提案などの話し手からの働きかけに対する反応の仕方は聞き手によって様々である。指導に当たっては、「聞くこと」が目的を持った能動的な活動であることを念頭に、ただ聞くだけではなく、場面などの設定を工夫しながら、話し手がどのような人で何を求めているのか、その場面ではどのような応答が適切かについて考えさせ、内容を踏まえて自分の意見や考えを表現させる機会を授業において提供することが重要である。例えば、「明日までの宿題の連絡」や「近日中に開催される行事についての予定変更連絡」といった場面を設定し、要点をまとめたり、メモをとったり、理解できない部分があっても推測するなどしながら大切な部分を理解する活動などが考えられる。また、普段の授業を自然な英語の使用場面に近づけていくことが大切である。自然な口調で英語が話されているか、発話の速度はどうであるか、生徒が英語の音変化やリズムになれることができるように工夫をしているか、などにも留意する必要がある。

読むこと

○まとまりのある文章を読んで大切な部分を読み取る指導の充実

説明文などの大切な部分をとらえさせるには、文章全体を通して読み、複数の情報の中から書き手が最も伝えたいことは何かを判断する力を身につけさせる必要がある。文章全体を漫然と読ませるのではなく、繰り返し用いられている語句や問いかけなどの手がかりをもとに、最も大切な語句や文を選ばせたり、各段落の働きを理解させたりする指導が重要である。手順としては

- ①全体のおおまかな内容をとらえる。
- ②各段落で最も大切な内容を表す英文を選ぶ。
- ③それらを比較するなどして、生徒同士で大切な内容について意見交換する。

なお、「聞くこと」と同様に「読むこと」の言語活動においても、テキストの種類や目的に応じて、どのような読み方に焦点を当てて指導するかを明確にすることも必要である。

書くこと

○考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書く指導の充実

まとまりのある文章を書くためには、文と文の順序や相互の関連にも注意を払い、全体として一貫性のある文章を書くことができるようにする必要がある。また、テーマにしたがって書く際には、どのように書けば読み手に伝わるのか考えながら書く必要がある。そのため、語や文法事項等を正しく理解して書き表すことができるように指導する

ことが必要である。具体的な指導としては、

- ・「話して書く」「読んで書く」等の領域を統合した指導を行う。
→読んだことについて感想や意見を記述するなど、一連のプロセスとして指導する。
- ・英文を読み合い、よりよく読み手に伝わるように書く指導を行う。
→相手に正しく伝わっているか、生徒自身が気づき、修正し、正確さを高める指導を行う。
- ・書くことを増やすための指導を行う。
→なぜ書けないのか、何につまずいているかを把握し、どのようにすれば書けるようになるかを内容、文章構成、語彙や表現の面での手立てを考える。

話すこと

○情報や考えなどを即興で伝え合う指導の充実

日頃の授業で、継続的なやり取りをする機会を増やし、それができる力を育てることが大切である。また、やり取りが続けられるように、例えば生徒が関心のある身近な話題を提供したり、スピーチなどで扱ったことのあるテーマを取り上げたりするなど、既習事項を活用しやすくすることが必要である。原稿を準備するなどの準備時間をあえて取らず、伝え合う活動を行うことも必要である。

(参照) 平成 31 年度 (令和元年度) 全国学力・学習状況調査 報告書
平成 25 年度中学校学習指導要領実施状況調査
「英語を使うなにわっ子」育成プログラム 平成 25 年

3. 児童生徒質問紙調査結果の分析

①基本的生活習慣等

熊取町の児童生徒の基本的生活習慣等に関する質問に対する回答結果と学力調査結果のクロス集計により、以下の点が明らかになった。

「毎日朝食を食べていますか」の質問に対して、小中学校とも、質問紙の回答結果と学力調査結果の間に相関関係は見られなかった。「毎日、同じぐらいの時間に起きていますか」「毎日、同じ時間に寝ていますか」の質問に対して、小学校では緩やかな相関関係が見られたが、中学校では相関関係は見られなかった。「家の人と学校の出来事について話をしますか」については、小学校では、肯定的回答をしている児童の方が学力調査の正答率が高い傾向があったが、中学校では顕著な相関関係は見られなかった。

平成31年度の熊取町の基本的生活習慣等に関する調査結果を、昨年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校では「学校での出来事について話をする」割合は減少しているが、「朝食を毎日食べている」「毎日、同じぐらいの時刻に寝ている」「毎日、同じぐらいの時刻に起きています」と回答した児童の割合は増加している。平成31年度の全国、大阪府の結果との比較では、「朝食を毎日食べている」割合は全国・大阪府より低いが、「就寝・起床時間」「学校での出来事を話す」割合は全国とほぼ同じ状況であった。

一方、中学校では、昨年度の熊取町の結果と比較すると「朝食を毎日食べている」「毎日、同じぐらいに寝ている」と回答した生徒の割合は増加しているが、「毎日、同じぐらいの時刻に起きています」と回答した生徒の割合はやや減少、「学校での出来事について話をする」割合は大幅に減少している。平成31年度の全国、大阪府との比較では、「朝食を毎日食べている」「学校での出来事について話をする」割合は、全国より低かった。

「朝食」「就寝時間」については、小中学校とも改善傾向にあるものの、家庭でコミュニケーションをとる割合は、年々低下している。基本的生活習慣の確立は、子どもがよりよく成長していく上で重要であり、特に、栄養・睡眠・運動の3つの要素は非常に大切である。児童生徒が、基本的生活習慣等自らの生活について自覚するとともに、学校と家庭が協力することや保護者がその重要性を理解することが大切である。

②挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等

「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、8割程度で、大阪府よりやや高く、全国よりも低い。中学校においては肯定的な回答の割合は、7割程度で、大阪府よりやや低く、全国よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では0.4ポイント、中学校では9.4ポイント減少した。学力調査結果との関連性については、小学校においては相関関係は見られたが、中学校において

は見られなかった。自尊感情は幼少期からの様々な体験や、成就感、達成感等を味わうことにより育まれるものである。特に中学校においては、昨年度から減少した結果を踏まえて、その要因を捉えるとともに、児童生徒一人ひとりを大切にしながら日常の教育活動を行い、保護者、地域に対してもその必要性を啓発することが必要である。

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていますか」については、小学校での肯定的回答は8割を超え、中学校では7割を超えているが、全国、大阪府より低く、「どちらかといえば、あてはまらない」の割合が小中学校とも全国、大阪府よりも高い。昨年度の調査結果と比較すると、小中学校とも肯定的回答の割合は増加している。しかし、先生に対して「よいところを認めてくれている」と感じている児童生徒の割合は、全国、大阪府より低い結果であったため、引き続き、教職員は児童生徒とのコミュニケーションを大事にし、表情、ジェスチャー、言葉でもって児童生徒のよさを伝え、互いのもちあじを認めあえる集団づくりを進めていく必要がある。

「先生は分かるまで教えてくれていますか」については、小学校の肯定的回答は9割を超え、全国、大阪府より高い。中学校においては、肯定的回答の割合は8割程度で、全国より7.2ポイント、大阪府より3ポイント低い。学習指導において、児童生徒は教師に対して一定の満足感を得ている傾向が伺えるが、引き続き、主体的に児童生徒が学ぶ場面と教師が教える場面をうまく入れながら、授業を展開する必要がある。

「将来の夢や目標を持っていますか」については、小学校における肯定的回答は8割を超え、全国、大阪府よりも高い。中学校においては7割程度で、大阪府よりもやや高く、全国より低かった。

「難しいことでも挑戦していますか」については、小中学校とも全国よりやや低いが、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことはありますか」「学級で協力して取り組みうれしかったことはありますか」については、小中学校とも全国、大阪府より高い。

「学校に行くのは楽しいか」については、小学校における肯定的回答は9割を超え、全国、大阪府よりも高い。中学校においては8割を超えているが、全国よりやや低く、大阪府よりも高かった。

「学校のきまり（〔中〕規則）は守っていますか」の質問に対し、小学校における肯定的回答の割合は9割を超え、全国とほぼ同じ、大阪府よりも高かった。また、昨年度の熊取町の結果と比較すると、5.4ポイント増加している。中学校においては、肯定的回答の割合は9割を超えているが、全国、大阪府よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、やや増加している。

「人が困っているときは、進んで助けていますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で9割を超え、全国、大阪府より高い。中学校では8割を超えているが、全国、大阪府より低い。

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で98.8%、中学校では93.9%であった。昨年度の熊取町の結果と比較

して、小学校では1.6ポイント増加、中学校では同じであった。小学校では「当てはまらない」と回答した児童はいないが、小学校では0.9%、中学校では5.8%の児童生徒が「どちらかといえば当てはまらない」と回答しており、これらの児童生徒への対応が課題である。学校の日々の取り組みや、家庭、地域との連携を図ることにより、児童生徒の理解の促進や意識改革に取り組むことが重要である。学校生活や社会生活を営む上で、規範意識を身につけることは必要不可欠である。社会全体の規範意識の低下が叫ばれる中、学校のみならず、家庭、地域の大人が現状をしっかりと認識し、率先して規範意識を守ることの大切さを子どもに示すことが必要である。

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問については、肯定的回答の割合は、小学校においては97.5%で、全国、大阪府よりも高かった。一方、中学校においては92.1%で、全国、大阪府よりもやや低かった。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では増加、中学校では減少している。学力調査結果との関連性については、小学校においては相関関係が見られたが、中学校においては見られなかった。引き続き、学校や家庭において、自分の役割を果たすことで周りから感謝されたり、達成感を味わったりする機会を充実させていくことが大切である。

③学習習慣等

「家で自分で計画を立てて勉強をしますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、7割程度で、大阪府より高く、全国よりも低い。一方、中学校においては肯定的な回答の割合は、5割程度で、大阪府よりもやや高く、全国よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では6.5ポイント増加、中学校では7.7ポイント減少した。

学習塾や家庭教師を含んだ家庭での学習状況をみると、小学校においては、1日「1～2時間学習している」割合が最も高く、次いで「30分～1時間」であった。一方、中学校においては、「1～2時間」が最も多く、次いで「2～3時間」であった。中学校の全国平均、大阪府平均についても「1～2時間」が最も多い。また、「全く平日に勉強をしない」割合は、小学生は3.2%、中学生は6.3%で、小学生は昨年度よりも1.7ポイント減少、中学生は0.4ポイント増加している。学力調査結果と家庭学習時間の関連性を見ると、小中学校とも顕著な相関関係は見られなかった。

学校以外での平日の読書時間については、全く読書をしない割合は、小学校では2割を超え、中学校では5割程度で、全国、大阪府より割合は高い。しかし、昨年度の調査結果との比較では、小学校で6.3ポイント、中学校で5.1ポイント減少しており、本に触れる児童生徒の割合は増加している。

「学校図書館や地域の図書館にどのくらい行くか」については、小学校においては「ほとんど、または全く行かない」割合は全国、大阪府より大幅に低い。一方、中学校においては、大阪府より低いものの、全国よりも高い。

「読書は好きか」については、小学校では肯定的回答は7割を超え、全国、大阪府より高い。一方、中学校においては、肯定的回答は6割程度で、全国、大阪府より低い。

「新聞を読んでいますか」の質問に対して「ほとんど、または全く読まない」と回答している小学生の割合は6割を超え、中学生は8割程度で、昨年度より、小中学校とも低下している。

以上の結果から、小学校においては、家庭学習の状況は改善されてきており、家庭学習の方法を提示したり、自学自習を進めたりするなど各校の取り組みの成果として、家庭学習の習慣が定着しつつあるといえる。学習内容の着実な定着を図るため、宿題、予習、復習等の家庭学習の習慣を身につけることは非常に大切であり、今後も保護者と連携しながら取り組みを進めたい。さらに、中学校においては小学校での取組みを継承しつつ、生徒が自主的に家庭学習を進めることができるような工夫を引き続き行う必要がある。

読書時間については、図書館司書や司書教諭が中心となりた取組みを充実させたことにより、昨年度より改善傾向にある。また、放課後や昼休みなど学校図書館や地域の図書館に通う小学生は多いが、中学校においては、教科の調べ学習等を学校図書館で行うなど授業で学校図書館に行くことはあるが、昼休みや放課後に行く中学生は少ない。今後、生徒が図書館に行きたいと思うような取組みを、図書委員会などが中心となり企画するなど、生徒主体の取組みを進めていくことも改善策として考えられる。

引き続き、学校図書館司書による読み聞かせや朝の読書活動において、児童生徒がじっくり本に向き合える時間を確保するとともに、それらの経験を通して読書の楽しさを感じ取ることができるよう学校全体で図書館教育を進めていくことが重要である。

④地域や社会に関わる活動の状況等

「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」に対する肯定的な回答は、小学生では7割程度で、全国、大阪府より高い。中学生では4割を超え、大阪府より高いが、全国よりも低い。昨年度と比較すると、小中学校とも割合は増加しているが、中学校の全国の割合は昨年度より大きく増加しているため、全国と比較すると低くなっている。

「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」については、小学校では肯定的回答の割合は6割程度で、全国、大阪府より高い。一方、中学校では3割を超え、大阪府とほぼ同じで全国よりも低い。昨年度の比較においては、小学校で15.5ポイント増加、中学校で3ポイント減少した。

「外国の人と友達になったり、外国のことを知ったりしたいと思いますか」「日本等について、外国の人に知ってもらいたいと思いますか」の質問については、今回新たに加わった項目であった。小学校では全国、大阪府より高いが、中学校では全国、大阪府より低かった。

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実施が重要であるとうたわれている。

学校において、地域の方々と触れ合う機会を持ち、よりよい社会をつくっていくという目標を持ちながら学びを進めることや学びを通して将来社会に出たときに必要となる力（外国の人を含めて他者と協力することや問題を解決しようと考えることなど）を身に付けることが、今後予測不能な社会で生き抜いていくためには必要となってくる。来年度からは、新学習指導要領の本格実施が小学校で始まる。今後の回答の推移を注視したい質問項目である。

⑤部活動に関する状況

学校の部活動に参加している生徒の割合は、83.4%で、大阪府より2ポイント高いが、全国よりも3.7ポイント低い。平成29年度と比較すると、4.6ポイント増加し、部活動所属の生徒数は増えている。

平日の部活動の時間は、2時間以上の割合は、47.3%で、全国、大阪府より低い。平成29年度とほぼ同じ割合である。

今回新たに「部活動に参加する理由」を問う質問が加わった。「楽しいから」(32.4%)の割合が最も高く、次いで「体力・技術を向上させたいから」(22.6%)であった。全国では、「体力・技術を向上させたいから」(28.9%)が最も高く、次いで「楽しいから」(26.3%)であった。熊取町においては、部活動所属率は全国よりも少ないが、楽しく部活動に参加しておる生徒が多く、各校においてクラブ運営をうまく行っている様子がうかがえる。平成31年度4月に各校で作成した「部活動運営方針」に基づき部活動を運営するとともに、部活動を通して「仲間と協力する大切さ」や「諦めることなく日々努力する大切さ」を学びとってほしいと考える。また、大阪体育大学と連携し、クラブ所属の大学生をスポーツ指導者として派遣するなど、部活動支援体制のさらなる充実を図っていきたい。

⑥ICTを活用した学習状況

今回新たに加わった質問内容である。

5年生〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、コンピュータなどのICTを週1回以上使用したと回答している割合は小学校では3割程度で、全国、大阪府より低い。一方、中学校では3割を超え、全国、大阪府より高い。

授業でもっとコンピュータなどのICTを活用したいと思うと回答している割合は小学校では全国、大阪府よりやや低く、中学校では全国、大阪府より高い。

小学校においては、来年度から本格的にプログラミング教育が始まる。熊取町においては、コンピュータの台数を増設し、児童一人一台使用出来るようになる。そのことにより、今後使用頻度が上がると予想される。中学校においては、技術の授業等において、コンピュータを使用する機会を多く設定しており、生徒がICTを活用する楽しさや便利さを感じ

じているため、よりICTを活用したいと思う生徒の割合が高いと考えられる。

⑦主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

「話しあう活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」については、小中学校とも7割を超え、小中学校とも全国、大阪府より高い。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

新たな質問の「授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていますか」については、小学校では8割を超え、中学校では7割を超え、小中学校とも全国、大阪府より高い。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られたが、中学校では見られなかった。

「総合的な時間では、自分で課題を立てて、調べ、発表する学習活動に取り組んでいるか」については、小中学校とも大阪府より高いが、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られたが、中学校では見られなかった。

「学級での話し合いで互いの意見のよさを生かして、解決方法を決めているか」については、小中学校とも大阪府より高いが、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

新たな質問の「学級での話し合いを生かして、自分が努力することを決めて取り組んでいるか」については、小学校では全国、大阪府より高い。中学校では大阪府より高く、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られたが、中学校では見られなかった。

「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、話し合ったりする活動を行っているか」については、小学校では全国、大阪府より高い。中学校では大阪府より高く、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

「今まで受けた授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」については、小中学校とも全国、大阪府より高い。昨年度との比較では、小学校で6.5ポイント、中学校では1.8ポイント増加している。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られなかったが、中学校では見られた。

「今まで受けた授業では、自分の考えが伝わるように、話の組み立てなどを工夫して発表していたか」については、小中学校とも、大阪府より高く、全国とほぼ同じであった。昨年度より、小学校で7.5ポイント、中学校では1.7ポイント増加している。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

以上の結果から、各校において、新学習指導要領の着実な実施に向け、資質・能力（「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」）の育成をめざし、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を、日々の授業研究、校内研究授業や相互授業参観等を通して、熱心に行い、教育活動の質の向上を進めていることが

うかがえる。

(4) 児童生徒質問紙調査結果の分析

① 基本的な生活習慣等

熊取町の児童生徒の基本的な生活習慣等に関する質問に対する回答結果と学力調査結果のクロス集計により、以下の点が明らかになった。

「毎日朝食を食べていますか」の質問に対して、小中学校とも、質問紙の回答結果と学力調査結果の間に相関関係は見られなかった。「毎日、同じぐらいの時間に起きていますか」

「毎日、同じ時間に寝ていますか」の質問に対して、小学校では緩やかな相関関係が見られたが、中学校では相関関係は見られなかった。「家の人と学校の出来事について話をしますか」については、小学校では、肯定的回答をしている児童の方が学力調査の正答率が高い傾向があったが、中学校では顕著な相関関係は見られなかった。

平成31年度の熊取町の基本的な生活習慣等に関する調査結果を、昨年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校では「学校での出来事について話をする」割合は減少しているが、「朝食を毎日食べている」「毎日、同じぐらいの時刻に寝ている」「毎日、同じぐらいの時刻に起きています」と回答した児童の割合は増加している。平成31年度の全国、大阪府の結果との比較では、「朝食を毎日食べている」割合は全国・大阪府より低いが、「就寝・起床時間」「学校での出来事を話す」割合は全国とほぼ同じ状況であった。

一方、中学校では、昨年度の熊取町の結果と比較すると「朝食を毎日食べている」「毎日、同じぐらいに寝ている」と回答した生徒の割合は増加しているが、「毎日、同じぐらいの時刻に起きています」と回答した生徒の割合はやや減少、「学校での出来事について話をする」割合は大幅に減少している。平成31年度の全国、大阪府との比較では、「朝食を毎日食べている」「学校での出来事について話をする」割合は、全国より低かった。

「朝食」「就寝時間」については、小中学校とも改善傾向にあるものの、家庭でコミュニケーションをとる割合は、年々低下している。基本的な生活習慣の確立は、子どもがよりよく成長していく上で重要であり、特に、栄養・睡眠・運動の3つの要素は非常に大切である。児童生徒が、基本的な生活習慣等自らの生活について自覚するとともに、学校と家庭が協力することや保護者がその重要性を理解することが大切である。

② 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等

「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、8割程度で、大阪府よりやや高く、全国よりも低い。中学校においては肯定的な回答の割合は、7割程度で、大阪府よりやや低く、全国よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では0.4ポイント、中学校では9.4ポイント減少した。学力調査結果との関連性については、小学校においては相関関係は見られたが、中学校において

は見られなかった。自尊感情は幼少期からの様々な体験や、成就感、達成感等を味わうことにより育まれるものである。特に中学校においては、昨年度から減少した結果を踏まえて、その要因を捉えるとともに、児童生徒一人ひとりを大切にしながら日常の教育活動を行い、保護者、地域に対してもその必要性を啓発することが必要である。

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていますか」については、小学校での肯定的回答は8割を超え、中学校では7割を超えているが、全国、大阪府より低く、「どちらかといえば、あてはまらない」の割合が小中学校とも全国、大阪府よりも高い。昨年度の調査結果と比較すると、小中学校とも肯定的回答の割合は増加している。しかし、先生に対して「よいところを認めてくれている」と感じている児童生徒の割合は、全国、大阪府より低い結果であったため、引き続き、教職員は児童生徒とのコミュニケーションを大事にし、表情、ジェスチャー、言葉でもって児童生徒のよさを伝え、互いのもちあじを認めあえる集団づくりを進めていく必要がある。

「先生は分かるまで教えてくれていますか」については、小学校の肯定的回答は9割を超え、全国、大阪府より高い。中学校においては、肯定的回答の割合は8割程度で、全国より7.2ポイント、大阪府より3ポイント低い。学習指導において、児童生徒は教師に対して一定の満足感を得ている傾向が伺えるが、引き続き、主体的に児童生徒が学ぶ場面と教師が教える場面をうまく入れながら、授業を展開する必要がある。

「将来の夢や目標を持っていますか」については、小学校における肯定的回答は8割を超え、全国、大阪府よりも高い。中学校においては7割程度で、大阪府よりもやや高く、全国より低かった。

「難しいことでも挑戦していますか」については、小中学校とも全国よりやや低いが、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことはありますか」「学級で協力して取り組もうれしかったことはありますか」については、小中学校とも全国、大阪府より高い。

「学校に行くのは楽しいか」については、小学校における肯定的回答は9割を超え、全国、大阪府よりも高い。中学校においては8割を超えているが、全国よりやや低く、大阪府よりも高かった。

学校のきまり（〔中〕規則）は守っていますか」の質問に対し、小学校における肯定的回答の割合は9割を超え、全国とほぼ同じ、大阪府よりも高かった。また、昨年度の熊取町の結果と比較すると、5.4ポイント増加している。中学校においては、肯定的回答の割合は9割を超えているが、全国、大阪府よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、やや増加している。

「人が困っているときは、進んで助けていますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で9割を超え、全国、大阪府より高い。中学校では8割を超えているが、全国、大阪府より低い。

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で98.8%、中学校では93.9%であった。昨年度の熊取町の結果と比較

して、小学校では 1.6 ポイント増加、中学校では同じであった。小学校では「当てはまらない」と回答した児童はいないが、小学校では 0.9%、中学校では 5.8%の児童生徒が「どちらかといえば当てはまらない」と回答しており、これらの児童生徒への対応が課題である。学校の日々の取り組みや、家庭、地域との連携を図ることにより、児童生徒の理解の促進や意識改革に取り組むことが重要である。学校生活や社会生活を営む上で、規範意識を身につけることは必要不可欠である。社会全体の規範意識の低下が叫ばれる中、学校のみならず、家庭、地域の大人が現状をしっかりと認識し、率先して規範意識を守ることの大切さを子どもに示すことが必要である。

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問については、肯定的回答の割合は、小学校においては 97.5%で、全国、大阪府よりも高かった。一方、中学校においては 92.1%で、全国、大阪府よりもやや低かった。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では増加、中学校では減少している。学力調査結果との関連性については、小学校においては相関関係が見られたが、中学校においては見られなかった。引き続き、学校や家庭において、自分の役割を果たすことで周りから感謝されたり、達成感を味わったりする機会を充実させていくことが大切である。

③学習習慣等

「家で自分で計画を立てて勉強をしますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、7割程度で、大阪府より高く、全国よりも低い。一方、中学校においては肯定的な回答の割合は、5割程度で、大阪府よりもやや高く、全国よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では 6.5 ポイント増加、中学校では 7.7 ポイント減少した。

学習塾や家庭教師を含んだ家庭での学習状況をみると、小学校においては、1日「1～2時間学習している」割合が最も高く、次いで「30分～1時間」であった。一方、中学校においては、「1～2時間」が最も多く、次いで「2～3時間」であった。中学校の全国平均、大阪府平均についても「1～2時間」が最も多い。また、「全く平日に勉強をしない」割合は、小学生は 3.2%、中学生は 6.3%で、小学生は昨年度よりも 1.7 ポイント減少、中学生は 0.4 ポイント増加している。学力調査結果と家庭学習時間の関連性を見ると、小中学校とも顕著な相関関係は見られなかった。

学校以外での平日の読書時間については、全く読書をしない割合は、小学校では 2割を超え、中学校では 5割程度で、全国、大阪府より割合は高い。しかし、昨年度の調査結果との比較では、小学校で 6.3 ポイント、中学校で 5.1 ポイント減少しており、本に触れる児童生徒の割合は増加している。

「学校図書館や地域の図書館にどのくらい行くか」については、小学校においては「ほとんど、または全く行かない」割合は全国、大阪府より大幅に低い。一方、中学校においては、大阪府より低いものの、全国よりも高い。

「読書は好きか」については、小学校では肯定的回答は7割を超え、全国、大阪府より高い。一方、中学校においては、肯定的回答は6割程度で、全国、大阪府より低い。

「新聞を読んでいますか」の質問に対して「ほとんど、または全く読まない」と回答している小学生の割合は6割を超え、中学生は8割程度で、昨年度より、小中学校とも低下している。

以上の結果から、小学校においては、家庭学習の状況は改善されてきており、家庭学習の方法を提示したり、自学自習を進めたりするなど各校の取り組みの成果として、家庭学習の習慣が定着しつつあるといえる。学習内容の着実な定着を図るため、宿題、予習、復習等の家庭学習の習慣を身につけることは非常に大切であり、今後も保護者と連携しながら取り組みを進めたい。さらに、中学校においては小学校での取組みを継承しつつ、生徒が自主的に家庭学習を進めることができるような工夫を引き続き行う必要がある。

読書時間については、図書館司書や司書教諭が中心となりた取組みを充実させたことにより、昨年度より改善傾向にある。また、放課後や昼休みなど学校図書館や地域の図書館に通う小学生は多いが、中学校においては、教科の調べ学習等を学校図書館で行うなど授業で学校図書館に行くことはあるが、昼休みや放課後に行く中学生は少ない。今後、生徒が図書館に行きたいと思うような取組みを、図書委員会などが中心となり企画するなど、生徒主体の取組みを進めていくことも改善策として考えられる。

引き続き、学校図書館司書による読み聞かせや朝の読書活動において、児童生徒がじっくり本に向き合える時間を確保するとともに、それらの経験を通して読書の楽しさを感じ取ることができるよう学校全体で図書館教育を進めていくことが重要である。

④地域や社会に関わる活動の状況等

「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」に対する肯定的な回答は、小学生では7割程度で、全国、大阪府より高い。中学生では4割を超え、大阪府より高いが、全国よりも低い。昨年度と比較すると、小中学校とも割合は増加しているが、中学校の全国の割合は昨年度より大きく増加しているため、全国と比較すると低くなっている。

「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」については、小学校では肯定的回答の割合は6割程度で、全国、大阪府より高い。一方、中学校では3割を超え、大阪府とほぼ同じで全国よりも低い。昨年度の比較においては、小学校で15.5ポイント増加、中学校で3ポイント減少した。

「外国の人と友達になったり、外国のことを知ったりしたいと思いますか」「日本等について、外国の人に知ってもらいたいと思いますか」の質問については、今回新たに加わった項目であった。小学校では全国、大阪府より高いが、中学校では全国、大阪府より低かった。

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実施が重要であるとうたわれている。

学校において、地域の方々と触れ合う機会を持ち、よりよい社会をつくっていくという目標を持ちながら学びを進めることや学びを通して将来社会に出たときに必要となる力（外国の人を含めて他者と協力することや問題を解決しようと考えることなど）を身に付けることが、今後予測不能な社会で生き抜いていくためには必要となってくる。来年度からは、新学習指導要領の本格実施が小学校で始まる。今後の回答の推移を注視したい質問項目である。

⑤部活動に関する状況

学校の部活動に参加している生徒の割合は、83.4%で、大阪府より2ポイント高いが、全国よりも3.7ポイント低い。平成29年度と比較すると、4.6ポイント増加し、部活動所属の生徒数は増えている。

平日の部活動の時間は、2時間以上の割合は、47.3%で、全国、大阪府より低い。平成29年度とほぼ同じ割合である。

今回新たに「部活動に参加する理由」を問う質問が加わった。「楽しいから」(32.4%)の割合が最も高く、次いで「体力・技術を向上させたいから」(22.6%)であった。全国では、「体力・技術を向上させたいから」(28.9%)が最も高く、次いで「楽しいから」(26.3%)であった。熊取町においては、部活動所属率は全国よりも少ないが、楽しく部活動に参加しておる生徒が多く、各校においてクラブ運営をうまく行っている様子がうかがえる。平成31年度4月に各校で作成した「部活動運営方針」に基づき部活動を運営するとともに、部活動を通して「仲間と協力する大切さ」や「諦めることなく日々努力する大切さ」を学びとってほしいと考える。また、大阪体育大学と連携し、クラブ所属の大学生をスポーツ指導者として派遣するなど、部活動支援体制のさらなる充実を図っていきたい。

⑥ICTを活用した学習状況

今回新たに加わった質問内容である。

5年生〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、コンピュータなどのICTを週1回以上使用したと回答している割合は小学校では3割程度で、全国、大阪府より低い。一方、中学校では3割を超え、全国、大阪府より高い。

授業でもっとコンピュータなどのICTを活用したいと思うと回答している割合は小学校では全国、大阪府よりやや低く、中学校では全国、大阪府より高い。

小学校においては、来年度から本格的にプログラミング教育が始まる。熊取町においては、コンピュータの台数を増設し、児童一人一台使用出来るようになる。そのことにより、今後使用頻度が上がると予想される。中学校においては、技術の授業等において、コンピュータを使用する機会を多く設定しており、生徒がICTを活用する楽しさや便利さを感じ

じているため、よりICTを活用したいと思う生徒の割合が高いと考えられる。

⑦主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

「話しあう活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」については、小中学校とも7割を超え、小中学校とも全国、大阪府より高い。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

新たな質問の「授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていますか」については、小学校では8割を超え、中学校では7割を超え、小中学校とも全国、大阪府より高い。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られたが、中学校では見られなかった。

「総合的な時間では、自分で課題を立てて、調べ、発表する学習活動に取り組んでいるか」については、小中学校とも大阪府より高いが、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られたが、中学校では見られなかった。

「学級での話し合いで互いの意見のよさを生かして、解決方法を決めているか」については、小中学校とも大阪府より高いが、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

新たな質問の「学級での話し合いを生かして、自分が努力することを決めて取り組んでいるか」については、小学校では全国、大阪府より高い。中学校では大阪府より高く、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られたが、中学校では見られなかった。

「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、話し合ったりする活動を行っているか」については、小学校では全国、大阪府より高い。中学校では大阪府より高く、全国よりも低い。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

「今まで受けた授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」については、小中学校とも全国、大阪府より高い。昨年度との比較では、小学校で6.5ポイント、中学校では1.8ポイント増加している。学力調査結果との関連性については、小学校では相関関係が見られなかったが、中学校では見られた。

「今まで受けた授業では、自分の考えが伝わるように、話の組み立てなどを工夫して発表していたか」については、小中学校とも、大阪府より高く、全国とほぼ同じであった。昨年度より、小学校で7.5ポイント、中学校では1.7ポイント増加している。学力調査結果との関連性については、小中学校とも相関関係が見られた。

以上の結果から、各校において、新学習指導要領の着実な実施に向け、資質・能力（「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」）の育成をめざし、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を、日々の授業研究、校内研究授業や相互授業参観等を通して、熱心に行い、教育活動の質の向上を進めていることが

うかがえる。